

2021年11月7日 説教「やもめの息子は生き返り」

列王記第一 17章 17～24節

ツアレファテに導かれた預言者エリヤはやもめと出会い、不思議な道を通らされて、主の言われるようにやもめを通して養われました。



フォード・マトックス・ブラウン
「エリヤと未亡人の息子」(1864年)

1. やもめはエリヤに問う (17～18節)

①やもめの息子の死 (17)「これらことがあった後、この家の主婦の息子が病気になった。その子の病気は非常に重くなり、ついに息を引き取った。」「これらことがあった後」とありますが、それはやもめが残っていた一握りの粉と油を主に差し出し、エリヤのためにパン菓子を作ったことに発します。結果、長期間にわたって、その家の粉と油は無くなることはなかったのです。彼女はエリヤと会う前までは、その粉と油でパンを作って息子と二人で食べた後は、死を待つつもりでした。それが、不思議な御力によって、生かされることになりました。ところが、そうした死線を越えて、生かされて来たにもかかわらず、やもめの息子は重大な病気になってしまったのです。しかも、その病は日に日に悪化して、なんと死を招くことになってしまったのです。ところがその過程で、エリヤは、やもめの息子のいやしのために用いられることはありませんでした。

②やもめの不信 (18)「彼女はエリヤに言った、『神の人よ。あなたはいったい私にどうしようとなさるのですか。』」愛する息子の死を受けて、彼女はエリヤに訴えます。ここで、「神の人よ」と呼びかけていますが、もはや神への信仰も弱っています。エリヤに対する全幅の信頼も怪しくなっています。言います。「あなたはいったい私にどうしようとなさるのですか。あなたは私たちを救うために来てくださったのではないのですか。いったい、何のために私たちの所にやって来られたのですか。」

③来た理由は (18)「あなたは私の罪を思い知らせ、私の息子を死なせるために来られたのですか。』」あなたは罪深い私の罪を思い知らせるために来られたのですか。息子の命をとることによって、私の罪を罰せられようとしているのでしょうか。息子は私にとって、生きることをすべてと言っても良いのに、こんなことになるとは、あんまりです。』彼女の思いの吐露でした。

2. 息子のための切実な祈り (19～21節)

①屋上の部屋に (19)「彼は彼女に、『あなたの息子を私によこしなさい。』と言って、その子を彼女のふところから受け取り、彼が泊まっていた屋上の部屋にかかえて上がり、その子を自分の寝台の上に横たえた。」エリヤはやもめに『あなたの息子を私によこしなさい』と言って、彼女のふところから息子を受け取っています。ということは、この息子はまだ少年だったということがわかります。それも女性が抱えられるほどですから、幼児かもしれません。大きくても7～8歳でし

よう。エリヤはその少年を、彼が寝泊りしていた屋上の部屋に連れていきます。そして、自分の寝台の上に横たえたのです。エリヤにとっても、このことは重大でした。自分の信じる神への信頼と証しのゆえに、どうしてもなさねばならなかったのです。

②主への祈り (20)「彼は主に祈って言った。『私の神、主よ。私を世話してくれたこのやもめにさえもわざわざを下して、彼女の息子を死なせるのですか。』」エリヤがすることは、いやしのわざではありませんでした。彼は寝台の上の息子の死の現実を受け取ったままで、主に祈ったのです。『神よ。私をこの地に送られた主よ。この子の母は、粉や油がない時にも私に食事を用意してくれた人で、以後もずっと世話をしてくれています。そもそも、この人に出会い与えられたのは主です。それなのに、今そのやめもの幼い息子は死んでしまったのです。どうしてでしょう。』

③いのちを返して (21)「そして、彼は三度、その子の上に身を伏せて、主に祈って言った。『私の神、主よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに返してください。』」エリヤは三度、その子の遺体の上に身を伏せたのです。そして、祈りました。『この子のいのちをこの子のうちに返してください。』この子の地上での命を回復させてください。考えてみれば、この少年も自分のパンの食べる分の一部を、エリヤに譲ってくれたこととなります。命の恩人です。エリヤは全身全霊で祈ったのです。

3. やもめの信仰への道 (22~24 節)

①生き返る (22)「主はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちはその子のうちに返り、その子は生き返った。」主はエリヤの願いを聞いてくださいました。いのちの造り主である方は、死んだその子のうちにいのちを戻して下さったのです。少年は生き返ったのです。これは、ただただ主の恵みです。私たちに、恵みによって、肉体の命が与えられているように、この子が生き返ったのも恵みによるのです。

②母親に渡す (23)「そこで、エリヤはその子を抱いて、屋上の部屋から家の中に降りて来て、その子の母親に渡した。そして、エリヤに言った。『ご覧、あなたの息子は生きています。』」エリヤはこの恵みにあずかると、その子を抱き、自分が使っていた屋上の部屋から、やもめが住んでいた家の中に降りて来て、生き返った子を母親に渡したのです。『ご覧なさい。あなたの息子は生きていますよ。』エリヤにはこのことを誇るような様子は一切見られません。息子が一度は死んだのに、今は生きていますということを母親に伝えたのです。

③あなたは神の人 (24)「その女はエリヤに言った。『今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある主のことばが真実であることを知りました。』」やもめは、エリヤに会いパンを所望された時には、「あなたの神は生きています」と告白しました。しかし、息子が命を落と

した後は、エリヤに対して不信感を持ち始め、彼を責める心もありました。しかし、息子が生き返ったという事実を確認して、驚きつつ、告白しました。『あなたが神の人であり、あなたを通して語られる主のことばが真実であるということを知りました。』。主なる神の存在、御力を認め、その真実さに彼女は触れて、改めて主を告白しているのです。喜び踊るような感覚と、不信を持った自分を恥じた面もあったのではないのでしょうか。

《結論》

エリヤについては、新約聖書でも特別な預言者として扱われています。今

朝の聖書箇所にはその理由の一端があると考えられます。といたしますのは、クリスチャンは日頃から、新約聖書の福音書からイエス・キリストのお働きを読んでいます。そこで、今朝の記事を読んでも、それほど驚きを感じないかもしれません。しかし、旧約聖書を創世記から順番に読んでいっても、死人の生き返りの出来事は出てきません。その面では、エリヤが関わったやもめの息子が生き返ったという出来事は、ユダヤ人にとっても特別でした。もちろんエリヤが、生き返らせたものではありません。神がエリヤの祈りを用いて、この少年を生き返らせて下さったのです。とはいえ、預言者エリヤは大いに用いられたと言って良いでしょう。新約聖書を開いても、イエス・キリストの復活以外で、生き返り（復活、蘇生）のことが記されているのは、ラザロの出来事（ヨハネ 11 章）だけです。そういう意味で今朝の記事は、新約的であると言っても良いでしょう。福音書の香りがします。

イエス・キリストの福音は「十字架と復活の福音」です。人間の罪からの贖いのために十字架上で死なれた主イエスは、三日目によみがえられました。復活は死という、人間にはいかんともしがたい課題に対する希望です。そのキリストはラザロにも関わり、生き返りを与えてくださいました。エリヤ自身については、通常の死の迎え方とは異なる道をとらされたのですが（Ⅱ列王 2 章）、ここではそれは扱いません。エリヤがバプテスマのヨハネの先駆けとして立てられ、いのちの問題に関わったという事に注目していきます。

次に、「生き返る」ということの意味を考えましょう。エリヤが少年の生き返りに関わったということの意味です。エゼキエル書 37 章に興味深いことが記されています。「神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、まえたちは生き返る。わたしがおまえたちに筋（すじ）をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしが主であることを知ろう。」(5~6 節)。生き返りの出来事を通して、このやもめも「今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある主のことばが真実であることを知りました」

(24 節) と告白しています。彼女は漠然とではなく、この出来事を通して、はっきりと主を知ることができたのです。

それでは、私たちにとって、これはどのような意味があるでしょう。さきほどのエゼキエル書 37 章 14～15 節にこうあります。「わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。主の御告げ」。私たちはキリストの復活の福音を知らされています。この福音は私たちに、現実に霊的な生き返りを与えてくれるのです。復活信仰は、私たちの魂を生き生きと生かす大いなる土台です。地上に生きる私たちにとって、復活の主の福音に立つことは、御国の希望と喜びに満ちた歩みをする礎なのです。ここに立ちましょう。